

〔講演〕

## 東亜同文書院大学から外務省へ

東亜同文書院大学第42期生、愛知大学第1期卒 小崎 昌業

小林 それでは定刻となりました。本日は「東亜同文書院大学から愛知大学へ」をテーマとした長崎展示会・講演会にお越しいただき誠にありがとうございます。本日、司会を務めさせていただき小林と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。講演会を開催致します前にご連絡いたします。こちら隣の建物の1階、運河ギャラリーにて、パネル展を開催しております。ぜひご覧下さい。また、この会場の皆様の側から向かって右手の方に写真が展示されてるかと思えます。こちらは昨年(2012年)12月14日にご逝去されました、愛知大学卒業の東松照明氏の写真を展示しております。東松氏はかつて長崎に住んでいたこともあり、この長崎美術館でも展覧会を開催したこともございます。ぜひご覧下さい。

これから講師の紹介をいたします。小崎昌業先生です。小崎昌業先生は1922年、中国青島生まれ、東亜同文書院大学及び愛知大学法経学部卒業後、外務省に入省し、外交官として駐モンゴル特命全権大使、駐ルーマニア特命全権大使等を歴任されました。それでは小崎先生、宜しくお願いいたします。

### 1. はじめに

小崎 小崎です。東亜同文書院大学の42期生であり、愛知大学の第1期生です。今日は東亜同文書院関係の皆様、お父さんが書院生であったり、私と同期の日高(操)君など多くの方々がお出でになっっていて大変嬉しく思います。

長崎は非常に懐しい所です。同文書院というのは、全国各府県から選抜生や派遣生を出して

おりましたが、最初、全員が東京に集まりました。1941(昭和16)年4月8日、42期生170名が東京の軍人会館に集まり、そこから伊勢、京都、大阪等の行事見学を終え、4月15日長崎に着きました。翌16日、上海丸で長崎を出発、翌日上海に着いたのです。当時日本は最後の平和を楽しんでいた時期であり、上海丸の船上では英米人の旅客と新入生の書院生が英会話を交えていたのを思い出します。

しかし、その年末になると「大東亜戦争」が始まり、翌42年は戦勝気分浸っていたものの、43年は戦況厳しく、我々学生の徴兵猶予は停止され、12月1日書院大学の学徒出陣が行われました。

書院は予科2年、学部3年制でしたが、42期生の場合、1942年1月に予科1年終了、2月に予科2年、(南京蘇州旅行)、42年10月学部1年、43年10月学部2年、(12月学徒出陣)という具合に期間が短縮されました。



## 2. 東亜同文書院大学の生活

1922(大正11)年、私は青島に生まれました。赤い屋根、緑の山、青い海、ドイツが作った非常に美しい街でした。蒋介石による北伐、済南事変等を体験しましたが、小学一年生の時に帰国し、滋賀県の中学を卒業して同文書院に入りました。本命は書院と決めていたのです。

入学日の当日、県人会が開催され、私は汚い洗面器で老酒を飲まされました。その夜の寮回りでは窓ガラスの大半が吹き飛び、翌日学生監から大目玉を食らいました。また、大学正門に近い「杏花村」では上級生から「排骨麵」を勧められましたが、始めは喉を通りませんでした。しかし、そのうちに美味しくたまらなくなりました。酒も強くなり、寮回りの片棒を担いだりしました。ありがたかったのは、上級生が朝夕院子(庭)で中国語の発音を教えてくれたり、街案内をして食事に誘ってくれたりすることでした。

質朴剛健の気風の中で、上級生が下級生の面倒を見、下級生が上級生に礼を尽くす全寮生活、部(運動部)活動の中で生まれる親近感、教室内だけでない教授たちとの人間的触れ合い(家庭訪問)、中国全土にまたがる先輩後輩の家族的関係等、暖かくよき伝統の中で、我々の夢多き青春生活は忘れ難い貴重なものとして育まれました。旅行、運動会、演芸会、好的会、部会、県人会、先輩訪問等々思い出は尽きません。学徒動員(出陣)のため、我々の書院生活は短縮されてしまいましたが、書院生活が我々の人格に与えた影響は強く大きかったです。

## 3. 大旅行と先輩たち

同文書院には有名な「大旅行」というものがありました。これは、一期生より終戦に至るまでの45年間、絶えることなく続けられた中国大陸調査旅行のことです。旅行に出た学生数は5000名にのぼり、その規模の大きさ、その足跡の及んだ地域の広さ、残された尠大な調査記録、そのいずれをとっても、どこの学校もなし得なかった一大壮挙であり、学問的な大事業でした。

書院生の調査旅行は、毎年、卒業前年の夏、中国政府の許可証(執照)を受けて実施されました。数名単位の班が調査項目と地域を決め、約三カ月にわたって行った調査報告書は卒業論文となり、その成果は『支那省別全誌』等に結集され、中国理解のための大きな貢献をなしました。これこそ他校に見られぬ書院の一大特長でした。

大旅行が待ちきれなかった私は、予科二年の夏休みに、単身で華北、蒙古方面の旅行に出かけました。林出賢次郎(2期生)学生監の許可を受け、上海から船で青島に渡り、そこから済南、石家荘、大原、臨汾、汾陽、離石、陝西省対岸の黄河流域、大同、興和、包頭、張家口、北京等を鉄道で、鉄道のない所はトラック、馬車等で回りました。離石では警察署長の家の屋根でご馳走になっている時、城外から銃声が聞こえました。相当危険な地帯もありましたが、命の限界に挑戦するような気持ちで旅を続けました。

一文なしの、行き当たりばったりの木賃宿で南京虫に喰われたり、駅で寝たり、列車の中で中国人と弁当を分け合ったりの旅でした。しかし、いよいよ困った時に頼りになるのは、懐に入れていた書院同窓生の名簿でした。一面識もない先輩でも訪ねていけば、いろいろ援助してくれました。何日でも泊っていけよといった調子で、類い稀なる同窓会の絆の強さに心打たれました。

## 4. 在中国公館と先輩たち

私がこの旅行をした1942(昭和17)年当時、中国大陸における大使館、(総)領事館、分館等は38館あり、例えば新疆、哈爾濱、黒河、牡丹江その他にたいいてい書院の先輩がいました。

この時期、外務省で要職にあった先輩たちを名簿から拾ってみると、錚々たる顔ぶれです。

石射猪太郎(5期、本省東亜局長、ブラジル、タイ、オランダ大使)、堀内干城(8期、東亜局長、中国公使、上海総領事)、有野学(5期、済南総領事)、若杉要(3期、在米公使)、山本熊一(9期、アメリカ局長、東亜局長、外務次官、大東亜省次官)。

## 5. 学徒動員と軍隊生活

戦争の激化と学徒動員によって私共の運命は変わりました。1943(昭和18)年12月1日に多くの同僚と共に南京の陸軍61師団に入りまして、瀘州で初年兵教育を受けた後、私自身は経理部の幹部候補生として南京の陸軍経理学校(1期生)に入りました。2期生の訓練も終り、3期生の時、原隊へ復帰して師団司令部付主計を命ぜられ、上海の八字橋に向いました。当時は戦争末期で、南京、上海とも空襲を受け、沖縄攻略の後、米軍が中国大陸沿いに北上することも想定して、呉淞に地下陣地を構築しました。8月8日、ソ連の対日参戦。14日日本ポツダム宣言受託。15日終戦。

私は経理部将校として、師団隷下各隊に、終戦後3カ月は自活できるようにと上海外灘の横浜正金銀行へ現金受領に行きました。小切手は通用しないので、現金をトラックに山積みして司令部に持帰り、各隊に受取りに來させました。インフレ時代といえ、トラック満載の現金を一時に取り扱ったのは、この時だけです。

そこで書院に戻ろうとして現地除隊をしましたが、書院(第二次上海事変で焼却され、1939年以降交通大学を租借していた)は中国側に返却手続中であり、書院関係者は虹口の青年会館で共同生活を送っていました。

私は内山書店の裏側の「千愛里」の知人宅で軍服を脱いだのです。在留邦人全員が日本に引揚げ帰国することになっていましたが、引揚船は何時来るのか分らないし、日本の情報は何一つ掴めない。小岩井(浄)先生にゼミを開いてもらったりしましたが、何も分らない。

そのうち、国民政府の中央宣伝部に対日文化工作委員会なる組織が出来ました。これは在留邦人が残した接收財産を基金にして、日中間の新しい交流を図るという構想から生れた組織であり、私はこのために中国に残留しようとしていました。しかし中国の状況は複雑で事は容易に進まず、結局翌年の1946(昭和21)年5月に日本に引揚げました。

## 6. 愛知大学の創設

学業半ばにして動員された私は、帰国後の苦しい生活の中で、何としても学業を続けたかった。そのとき、小岩井先生から愛知大学の創設に参加せよとの要請があったので、1947(昭和22)年4月に豊橋に行きました。陸軍予備士官学校のあとの破れ校舎がこれから始まる大学でした。同文書院を中心に外地引揚げ学生88校の学生が入学しました。ゼロからの出発で誰もかれも苦勞しましたが、いずれも祖国再建の意気に燃え、新しい大学の在り方を模索しました。先生方は大学創設の資金問題で苦勞されていましたが、我々学生も芋や麦を作り雑炊を啜りながら破れ放題の寮に住み、荒涼たる学舎で学び、大学の在り方について侃々諤々の議論をしていました。私は初代の学生委員長に推されて、学内の組織作りや募金活動に追われ、勉強の方はほとんどできませんでした。しかし、今日立派に成長した愛大が中国研究において独特の権威を持ち、中国の諸大学と交流の輪を広げているのを見ると、書院と愛大を繋ぐ上で何がしかの貢献をしたという思いがします。

## 7. 外務省の仕事

### (1) 外務省に入省

1951(昭和26)年外務省に入りました。当時我が国は連合軍の占領下にあり、外交権はなく、吉田(茂)総理が外務大臣を兼任して講和条約の締結と我が国の独立回復に苦心されていました。その前年に「朝鮮動乱」が起こって、中共軍(中国共産党軍)が参戦したことは米国の危機感を高め、対日平和条約の成立を早める結果となり、サンフランシスコ平和条約と日米安保条約がそれぞれ署名されます。1951年9月署名、52年4月発効です。中国との間では台湾が中華民國政府として日華平和条約を締結し、1952年4月に発効し、国交は回復します。

教育熱心な吉田総理は我々外交官試験合格者を総理が住む、芝白金の外相官邸(今東京都の美術館になってますが)に我々を住み込ませ、

そこから外務省の研修所へ毎日通わせました。時には食事に招かれて薫陶を受けました。

1953(昭和28)年、外交官補として在中華民国大使館に赴任したのを皮切りにして、本省や通産省での勤務を交えながら、外国勤務はインドに2回、カナダ、シンガポール、ポーランド、モンゴル、それからルーマニアと続いています。入省以来、我が国がたどった戦後の苦難から復興の努力、高度成長期、経済大国化、国際国家への軌跡とそれに伴う様々な問題、責任、役割等の中、自分も共に歩いてきました。

## (2) 中華民国勤務

中共との内戦に敗れた国民党政府は1949(昭和24)年末に台湾に移って来ました。自分は1953(昭和28)年4月から3年間同地の大使館で勤務しましたが、その頃は、蒋介石総統が大陸反攻を呼号し、金門馬祖両島の国府軍と福建省の中共軍の間に砲撃戦がたえず、中共軍が台湾に侵攻する危険性が高まり、台湾海峡に戦雲がみなぎっていました。そこで、米国は米華相互防衛条約を締結して、第七艦隊を台湾海峡に派遣しました。台湾では上海在留時代に知り合った国民党政府の友人たちに巡り合い、海峡を挟んで対峙する国共双方の動きに関わる情報収集等、仕事の面で大いに協力を受けたのです。

我々が上海に抑留されていた時に国府軍の総参謀長であり、上海方面軍司令官であった何応欽將軍は、当時總統府の戦略顧問委員で、中日文化経済会長も兼ねていましたので、時々、一緒にゴルフをやりましたけど、非常にスマートな方でした。それから、戦時中勇猛をもって日本軍を恐れさせた湯恩伯將軍は農夫然とした好々爺で、基隆へ魚釣りに連れて行ってくれました。蒋介石の無二の親友で、總統府の秘書長をしていた張群さんとは時々食事を一緒にしましたけど、自分は陸士(陸軍士官学校)留学時代に生卵や冷や飯を食べられるようになりました。中国軍は、戦場でも熱いものを食べようとして、鍋や釜を持ち歩くけれども、これでは日本軍に勝てないというような話をしました。蒋介石総

統、宋美齡夫人にも時々お目にかかりました。

台湾在勤において忘れられないのは日本の国連加盟問題です。これは色々国連本部でいきさつがありましたが、ここでは省略します。1956(昭和31)年10月に日ソ共同宣言の署名があり、日ソ国交が回復しましたが、その翌月の11月に日本の国連の単独加盟が実現しました。ソ連ではスターリンが死亡し、フルシチョフがスターリン批判を行っていた頃であります。

当時、台湾では大使館、商社、新聞社等に書院の同朋が多く、台湾出身の同窓も多かったです。例えば、私と同期の彭桂嶺、周文福、楊清輝、43期の張溪祥、16期林伯奏と44期林仲秋の父子等々。時々同窓会が開かれました。大使館には清水董三という我々の先輩がおりまして、当時は参事官だったんですが、後に公使になりました。中国文化の造詣が深く、書画の達人で、その当時、すでに今日の中国大陸の姿を予見しておりましたことに感服しています。台湾ではゴルフを始めました。

## (3) インド勤務

1960(昭和35)年10月から3年間、カルカッタ(現コルカタ)総領事館で勤務しました。この年は日米安保条約改定で国会周辺が騒然とし、内閣が変わり、池田(勇人)首相が所得倍増計画を打ち出して、ケネディ米大統領が選出されました。インドでは中印国境紛争が続いておりました。その頃、ソ連がキューバにミサイル基地を建設していることが発覚して、米国はこれを阻止するためにキューバの海上封鎖を行い、米ソ間は一触即発の危機を迎えましたが、ソ連が攻撃兵器を撤収したため、危機は収まりました。

パールという判事が東京裁判で日本の無罪論を主張しましたように、インドは心情的に前の大戦を理解しようとしていました。特にカルカッタ出身でインド独立のために日本軍と協力して戦ったチャンドラ・ボースは国民的英雄として尊崇され、ベンガル地方の人々はボースが死んだことは決して信じようとしませんでした。このボースと共にインド独立国民軍をシンガポールで編成し、ビルマで戦った国塚一乗さんが当時カルカ

ッタにいました。その名著『インド洋に架ける橋』は映画化もされました。国塚さんは現在神戸でまだ元気でられます。

カルカッタには25期の根岸さんという三菱商事の支店長と、同期で42期の石川君という日綿支店長がおりました。そのほか、シンガポールとか、香港とか、東南アジアには同窓がたくさんおりました。

カルカッタの在勤中に皇太子殿下(現天皇)ご夫妻が2回(1960年、62年)、インドを訪問され、池田総理の訪問もありました。我々はいずれの場合もその受け入れ体制を準備するのに苦労しました。皇太子殿下は魚類の研究で有名な方です。「マシイア」という珍しい魚をご所望になりまして、インド政府に頼んだのですが、いつまでたっても返事が来ない。結局自分がヒマラヤの奥の溪流まで行って探す破目になり、その稚魚何十尾かを日本へ空送しました。殿下二度目のご来印の時、その魚のことを伺ったら、あれは残念ながら死んでしまったということで私もがっかりしました。

インドでは科学技術協力についての仕事が多かったのですが、今でも忘れられないのがブータンに対する協力です。ブータンはインド東北部にある王国で、北はチベットに接する小国で、当時はまだ鎖国状態でした。外国人の入国はインド政府の規制もあって難しかった。たまたま、カルカッタにエリザベス女王が来られまして、州知事公邸でパーティーがあったときに日本の襦袢(どてら)のようなものを着た坊主頭の異様な人物がいたので、聞いてみるとブータンのドルジ首相だと言います。カルカッタには私邸があってよく出て来るとのことで、それから親しく交際するようになりました。私は日本酒をぶら下げて行って炭坑節を教えたりしました。その美しい夫人と妹さんがいました。ブータン人は日本人そっくりの顔つきで、特に親しみやすい。

そのうち、ドルジ首相からブータン開発に日本の援助を得たいという相談がありました。外務省に要請したところ、プラント協会から各種の専門家7名からなる開発調査団を派遣することになりました。自分も調査団に加わりブータンに入

りましたが、一行9名でした。ブータンの西部のパロまでジープで入りました。ジープも通らないような谷底にかかる道でしたけれども、やっとパロまで行って、そして、そこを拠点にして機材、テント、食糧等を運ぶキャラバンを組んで、馬に乗って各地方へ出かけました。野宿、自炊を重ね、一か月近い調査を行いました。4000メートル級の山が多いブータンでは、峻険な断崖沿いの狭い道しかありません。馬が跳ねたら千尋の谷底行きです。命がけの旅行でしたが、それでもようやく調査を終わって事後に報告書を提出しましたけれども、それにはまず農業開発を取り上げるべきだということが勧告されておりました。それで、日本政府からブータン農業開発援助が行われるようになりました。

私はこの数年後に外務省の技術協力課長に配置されたので、ブータン援助には特に配慮しました。農業専門家としてブータンに派遣された西岡さんという方が、長年農業改革に努力されて、その近代的農業はいまや驚くほど浸透し、農産物や果物の輸出も行われるにいたりしました。西岡さんにはブータン貴族の称号が与えられ、ブータンは今や、大の親日国になっています。ブータンの首都ティンプーの王宮でお目にかかった王妃は、ドルジ首相の妹さんで美しい人でした。のちに子供さん達を連れて来日されまして、お目にかかりましたが、その時のかわいい坊やが今や凛々しい国王です。ブータンは1971年に国連に加盟しました。現在国内開発はおおいに進んで、外国人観光客も受け入れております。惜しいことに、ドルジ首相は自分がインドを去りました翌年、暗殺されました。彼の開明的政策に反対する保守派がやったことじゃないかと思っています。

ブータンと共に忘れがたいのはシッキムです。ブータン西隣のシッキムであり、インドの保護領でした。両国の王室や貴族は親戚関係にあったので、私は次第にシッキムの人たちと親しくなりました。このシッキムの皇太子、のちのナムゲル王が米国人のホープ嬢と結婚することになりました。世界的な話題となって首都ガントクのラマ教寺院での結婚式に自分も招かれたのです。ガン

トクに行く途中、ヒマラヤのカリンボンにあるドルジ首相の別荘に一泊しました。そこへ数名の米国人女性がやってきて、その事後行動を共にすることになりました。彼女たちはボストンのラドクリフ女子大生で、ホープ嬢の同級ということでした。結婚式は世界の各地からいろいろな人が招かれて、連日連夜祝賀の宴と、ダンスパーティーが開かれ、シャンペンが山のように抜かれました。ここで、女子大生たちにその頃流行り出したツイストを教わりました。

世界の高峰カンチェンジュンガがそびえるシッキムの、折しも春たけなわの1963年3月でしたが、桃源郷を謳歌しておりました。しかし、小王国の悲しさでシッキムは1975年、王政を廃止されインドに併合されます。後日談になりますけども、私がルーマニアに勤務しておりました時に、その時のカープという米国大使にシッキムの話をしたことがあります。驚いたことに、王妃になったホープ嬢はカープ大使の親戚だそうです。国王が亡くなった後に、2人の子どもを連れて米国に帰り、現在ニューヨークに住んでいるという話でした。

#### (4)カナダ勤務

1963(昭和38)年10月在カナダ大使館に転任になり、オタワで生活することになりました。暑い国インドから寒い国カナダへの転任でありました。国情の比較は時間が無いのでやめます。

カナダ大使館では、政務広報文化を担当し、当時我が国は所得倍増計画が軌道に乗りまして、戦後の荒廃から立ち直って先進国に追いつけ、追い越せと。経済の発展に総力を挙げて努力しつつあった時期で、ようやくソニーとかホンダとか、松下の名前が世界に知られ始めていました。上を向いてがむしゃらに走っていた時代で、1964年に新幹線が開通し、東京オリンピックが開催されました。このような状況の日本には、各国の関心が高まって、カナダでも各方面から日本の実情を知りたいという要望が多く出ていました。日本の方としても、その発展ぶりを売り込む必要があり、かくして自分は日本紹介の講演にしばしば出掛けました。行く先はロータリー

クラブ、キワニスクラブ、学校、婦人団体、教会、その他様々でありました。

当時、中ソ対立、中ソ論争が先鋭化していた時代で、後に自分が駐在することになったルーマニアが自主独立外交の立場を固め、中ソ間の調停を試みるなど、チャウセスク書記長が東欧の一匹狼的存在を最も誇示した時期です。日本と北京との外交関係は無かったので、北京に特派員を出していたカナダのグローバル記事を東京に報告することもありました。カナダのオタワは非常に良い街です。

カナダではよくドライブ旅行しました。西部のカナディアンロッキーは千変万化の見もので、バンフやジャスパーなど憩いの地があります。東部の大西洋側は牧歌的な和やかな風景を展開します。カナダの女優作家モンゴメリの『赤毛のアン』の舞台となったプリンス・エドワード島には、その作品を書いた家が残っております。カナダ東部から米国のメイン州にかけては大きなロブスターの産地でいたる所にエビ料理屋があります。ニューヨーク、ワシントンにも車でよく行きました。夏休みの10日間で、米国縦断ドライブ旅行をしてオタワからトロント、デトロイト、シカゴ、セントルイス、ニューオリンズ、マイアミまで南下し、そこからテネシー、ケンタッキー、アパラチア山脈を戻ったら、ちょうど8000キロでした。

#### (5)東京勤務

1966(昭和41)年初めから東京での生活に戻りましたが、病気のために、その後8年間も日本にいたこととなります。その間に、中国で文化大革命が進行し、71年、中国の国連加盟、72年に日中国交正常化がそれぞれ実現しました。

帰国と同時に経済協力局に配置され賠償の仕事をしました。我が国は戦争の償いとして1950年にビルマ(現ミャンマー)、フィリピン、インドネシア、ベトナムと賠償協定を締結して、3643億円の賠償を支払うことになり、1976年に完済します。カンボジア、ラオス、中華民国、インドは賠償請求権は放棄しましたが、前2者、つまりカンボジアとラオスには我が国は無償援助を供与しました。これらの賠償は受け取り側の経済

発展と、社会福祉増進に役立つことを目的として、現金でなく、役務と生産物で供与しましたが、その実施調査のために上記の諸国の辺境へも出張しました。

次いで経済協力局、技術協力課長に配置されました。外交活動には各種の分野がありますが、経済協力は戦後輩出した新国家、その多くの開発途上国に対する外交活動の不可欠の分野になっています。技術協力課は専門家の対外派遣、外国人研究者の受入れ、機材供与、開発調査と協力、海外青年協力隊の派遣等を行うもので、外務省最大の予算と人員を持ち、その実施機関である海外技術協力事業団(のちに国際協力事業団)を主管しました。非常にやりがいのある仕事でしたが、多忙と過労が重なって病気で入院する羽目になりました。

病気療養後、文化事業部の文化第二課長に転じました。我が国は諸外国と文化協定を結び、文化混合委員会を開催し、文化交流を推進しておりますが、文化二課では、文化人の派遣と招聘、日本研究の振興、日本語教育の普及、外国人留学生の受入れ、青少年交流、在外公館の文化事業の振興等を実施しました。文化二課自体が、企画兼実施機関でありましたので、著名な文化人、芸術家、学者、スポーツ専門家等が連日二課に来られまして、外務省の中では珍しい華やかな雰囲気が漂っていました。しかし、文化交流の事務があまり多くて、文化二課だけではできないというので、その実施機関として国際交流基金が設立されました。

海外転出の話が出てきましたが、健康に自信がなかったので、国内勤務を希望したところ、通産省へ出向しろということになりました。(1970年)。通産省では56年通商局で仕事をしたことがあるので、2回目の出向です。ポストは繊維雑貨局の繊維雑貨輸出課長です。当時、繊維交渉は日米間の最大の政治問題となっていました。その渦中に飛び込んだのです。60年代後半から繊維が日本の日米貿易摩擦品目として登場し、後に佐藤(栄作)内閣が「繊維を売って、(沖)縄を買う」と、言われるほど沖縄返還交渉と絡んで、繊維交渉が熾烈を極めました。米国議会の圧力

によって、ニクソン政権は繊維輸出規制協定の締結を強く求めておりましたけれども。日本の繊維業界(繊維産業連盟)は、これに絶対に反対し、交渉は難渋しました。沖縄返還を悲願とする佐藤内閣にとって、繊維問題は経済から政治の次元に移っておりました。しかも米国議会の動きは急で、米国が一方的規制を強行する恐れが出てきたので、我が国の業界(繊維産業連盟)は先手を打って、輸出自主規制を行うことにしました。その作業に取り掛かり、自分も参加しましたが、毛、麻、化合織、縫製品(綿は別途)等の各分野の細目の輸出枠を設定する仕事は困難を極めました。ようやく決定し、71(昭和46)年3月、繊維産連は対米輸出自主規制の実施を宣言し、保利官房長官は政府によって、問題解決を期待する旨の談話を発表しました。しかしニクソン大統領は直ちにこれを拒否する声明を発表し、協定締結を強く迫りました。沖縄返還を求める日本政府は、米国の圧力に屈せざるを得なくなりました。この年、10月、ケネディ米大統領特使が来日し、田中(角栄)通産相との間で政府間協定を締結することにつき、合意が成立しました。これに基づいて、私は直ちにワシントンに出張し、約2か月間にわたって毎日国務省で交渉を続けました。この間、日本から繊維産連の督戦隊が来て、我々交渉団と同じホテルに泊まりこんでおりました。ようやく、翌72(昭和47)年1月、日米繊維協定が調印され、長い交渉に終止符が打たれました。

1971年は、繊維で大荒れした年ですが、国際情勢においても大きな変動がありました。いわゆるニクソン・ショックとドル・ショックです。ニクソンの対中関係正常化がキッシンジャー国務長官によって秘密裏に行われ、7月、突然我が国の頭越しにニクソン訪中計画は発表され、続いて、米国の中国国連加盟支持が表明されました。ベトナムでは米軍の「北爆」が続き、中国では林彪事件が起りました。繊維交渉による過労で再び私は倒れ、入院、手術することになりました。

## (6)シンガポール勤務

1974(昭和49)年2月、シンガポール大使館

へ公使として転出をしました。シンガポールは1819年以来、英領植民地となり、中継貿易港として、英軍基地としての英国植民地支配の中堅になっていました。戦後、シンガポールは英自治領からマレーシア連邦傘下を経て、1965年に独立しました。淡路島に等しい小さな島で、人口250万にすぎないですが、リークワンユー(李光耀)首相(客家出身)の指導宜しきを得て、東南アジアで最も繁栄する交通、海運、工業、金融、観光の中心になっております。人口の75%は中国人で、ほかはマレー人、インド人、ヨーロッパ人。言語は英語、中国語、マレー語、タミール語等が公用語となっております。

自分が赴任した頃は戦時中の日本軍による中国人虐殺に対する決済問題がまだ尾を引いていましたけれど、知日派の李光耀は積極的な対日接近策をとり、日本をモデルにするよう、国民に呼びかけ、新しくジュロン工業団地を開発し、外国の資本、技術の導入に熱心でした。日本側の協力も、石油精製工場(建設)が決まった、この頃です。その後、日本企業の進出は非常に増えました。その当時で、在留邦人は8000人を超え、日本人学校の生徒は2400人以上になりました。

当時の国際情勢の大きな変化は、北越(北ベトナム)の南越制覇により、ベトナム戦争が終結したことです。これは東南アジア情勢に大きな影響を及ぼすとともに、米国に深い後遺症を与えることになりました。他方、欧州の平和共存を模索する東西35か国は、長い交渉の末に歴史的なヘルシンキ文書に調印しました。シンガポールで忘れられないことは、日本のタンカー祥和丸がシンガポール海峡で座礁し原油が流出して、安全確認のため大使館が総力をあげて働いたことです。日本赤軍派によるシンガポール石油施設の占領や、マレーシアにおける米国、スウェーデン両大使館の占領事件が起きて、その解決に苦勞したことです。日本人学校の校舎の建設、これも苦勞しました。

シンガポールでは、中山一三という36期の日商岩井の支店長がおりまして、非常に中国側や華僑とつながりがありましたけれども数年後に惜し

いことに亡くなられました。西願寺守君(43期生)はシンガポール柔道を強化し、また後に日本人会の事務局長として、活躍しました。同君とはボルネオのサバ、サラワクを旅行しキナバル銅山、コタ・キナバル、サンダカン(サンダカン八番娼館)等を訪ねました。クチンにいた日商岩井の吉川績君(43期)が、珍しい首狩り族の部落へ案内してくれました。またインドネシアのメダンに出張した時は同地の領事館で同期の今野君がスマトラにいることを聞いて、文通することができました。シンガポールはきれいな街で、大きなゴルフ場もあります。

### (7)ポーランド勤務

1976(昭和51)年、ポーランド大使館公使になりまして、5月ワルシャワへ着きました。共産圏勤務は初めてであり、暗い雰囲気を想像して行ったのですが、初夏の日差しの下で空港から市内沿道にビキニ姿の美女たちが大勢肌を焼いているのを見て明るい印象を受けました。ポーランド人は非常に開放的で、日本人に対して特に親近感を持っております。それは日露戦争によるところが大きいのです。『ポーランド懐古』の歌にあるように、ポーランドは1795年から1918年までロシア、プロシヤ、オーストリーの三国に分割され祖国を失っていました。その分割時代の1905年、日露戦争でポーランドにとり不倶戴天の敵であるロシアを日本が痛撃したこと、ロシア領内のポーランド人が満州に送られ日本軍と戦わされたけれども、捕虜となって日本の収容所で受けた待遇は当時世界に冠たる日本武士道による情けあるものであったこと、この二つが重なり合って、日本人は立派な国民だという意識はポーランド人の中に今もあります。

ポーランド人の歴史は亡国の悲劇と、戦争の惨禍に満ちています。第一次大戦の結果、1918年にポーランドは独立を回復しますが、1939年ナチス・ドイツのポーランド侵入が開始され、西部はドイツ、東部はソ連に分割される。第二次大戦中東西よりの攻防戦とナチスの「死の収容所」での大量虐殺によって3000万のポーランド国民のうち600万が死んだといわれております。今で



も「アウシュビッツ」とか「マエダニク」の収容所は元のままの悲惨な形を留めております。

第二次大戦後ポーランドはソ連によって、他の東欧諸国と共に社会主義体制の箍をはめられました。しかし、ポーランドには他の社会主義国と違う点が二つあります。第一は国民の90%が熱心なカソリック教徒で、教会の力が非常に強いこと(1978年ヴァチカンの新法王にポーランド人のヨハネ・パウロ二世が選出された)。第二は農地の私有制が認められおり、農民の80%が個人農であること。さらにポーランドからの移民は欧州各国に多いが、特に米国では600万人(シカゴには100万人)おります。米国の政、官、経済界に多くの有力者を出し、ポーランド、米国関係は極めて親密です。ポーランド分割時代にナポレオンによってワルシャワ公国が作られたこともあり、ポーランド生まれのショパンやキューリー夫人はフランスに移って名を成しました。

ポーランド在勤時代に中国では周恩来、毛沢東の死去、四人組の逮捕、鄧小平の復活、四つの近代化の決定。中ソ友好条約廃棄、中国軍のベトナム攻撃、ソ連軍のアフガン介入といった事件が続きました。

ポーランドでも、よくドライブ旅行しました。ポーランド北東部の湖沼の多いマズール地方では、ある森林の中にヒトラーの対ソ侵攻「バルバロッサ作戦」の司令部であった大要塞を発見して驚きました。この辺りはドイツの代名詞のように思われている、プロイセンの本拠地で、13世紀から16世紀にかけドイツ騎士修道会がその領地としていたところであったから、ヒトラーは特別の執念をもったかもしれません。休暇には車でよく西欧諸国を旅行しました。東西両ベルリン、ウィーン、西独、オーストリア、スイス、イタリア、オランダ、ベルギー、フランス等々。

## (8) モンゴル勤務

1982(昭和57)年、モンゴル特命全権大使に任命され、ウランバートルに赴任しました。学生時代にもモンゴル、(中国の)内蒙古まで入りましたけれども北側には行けませんでした。今回は北京発の国際列車(モスクワまで6日間)で赴

任しましたが、ウランバートルまで30時間かかりました。空路もありましたが、中ソ対立の激化した1963年以来閉鎖されてきました。学生の際は京包線に乗って終点の包頭まで行きましたが、今回も同じ路線を八達嶺の長城を越えて集寧まで走り、そこから分かれて北上しました。四十年ぶりに見る沿線の風景には懐旧の念、禁じ得ざるものがありました。

現在のモンゴルはジンギスカンが生まれ、育ち、元朝の基礎を築いた故地であります。世祖フビライ時代まで、ユーラシア大陸に跨る史上空前のモンゴル大帝国が出現したのですが、その壮大な歴史も今は当時の首都、カラコルムの遺跡にわずかにその影を留めるに過ぎません。モンゴルは二百余年に渡って清朝の支配下にありましたが、清朝末期、内外蒙古を一丸とする汎モンゴル独立運動が激化しました。しかし、清朝の支配力の強かった内蒙は、分断されたまま中国に残り、外蒙がソ連の援助によって、ようやく1921年独立を達成し、1917年のロシア革命に次ぐ世界で2番目の社会主義国となりました。

モンゴルは基本的には牧畜国ですが、第二次大戦後、数次の五カ年計画により工農業生産も増大しました。その中で、日本の無償経済協力により建設された世界最大のカシミア製品工場が貴重な外資獲得に貢献しています。モンゴル人は、体制は異なっても、日本人と同じアジア人としての親近感を持ち、種々のプロジェクトについて日本側の協力を求めています。今は日本の相撲協会にモンゴル人の力士がわんざといるのはご存じの通りであります。モンゴル民族は、ジンギスカン以来の遊牧騎馬民族の伝統を持ち、競馬、弓術、相撲に長け、毎年7月の革命記念日にはこの3種目の全国競技会が行われます。中でも圧巻は、数百頭が一堂に参加する30キロの競馬です。しかも乗り手は6歳から12歳までの少年少女、手綱さばきも鮮やかに丘を越え、原野をよぎる世界最大最強の競馬、さすがジンギスカンの末裔かなと舌を巻きます。

## (9) ルーマニア勤務

1984(昭和59)年9月、特命全権大使を拝命し、

ルーマニア勤務を命ぜられ、ブカレストに赴任しました。ルーマニアでは21年間、チャウセスク大統領が厳しい中央集権的独裁政治をやっておりましたが、ソ連圏の中であって対ソ独立自主外交を展開した実績があります。1960年代初めにコメコンの経済統合計画に反対したり、中ソ対立の調停を試みたり、ワルシャワ条約軍の自国領通過を認めず、またその演習にも参加せず、68年の「ブラハの春」に対するソ連軍出動に反対し、79年のソ連軍のアフガン駐在を非難し、82年のロス・オリンピックに共産圏から単独参加するなど、ソ連一辺倒の東欧社会主義国の中で際立った自主性を発揮しました。しかし、最近は国際情勢の基礎変化のため、その自主外交が有名無実化しつつあります。これはゴルバチョフの登場によりソ連自体の動きと関係改善の努力が始まり、核軍縮についての米ソ首脳会議が行われたことによります。

ルーマニアは周囲をスラブ民族に囲まれたラテン民族国家です。なぜそうなったかという点、西暦106年以来しばらくこの地がローマの植民地だったからです。異民族の侵入に耐えられずローマ軍が撤収した後、1330年にワラキア公国、1365年にモルドバ公国が建国されるまで歴史上の空白期間が続きます。しかし、両国は14世紀末から強大となったオスマン・トルコの宗主権下に入り、1859年の両国統一を経て1877年の露土戦争でトルコが敗れ、ルーマニアが独立を獲得するまで、約400年トルコの統治下に苦しみました。他方、トランシルバニアはハンガリーの統治下にあったが、第1次大戦でハプスブルグ家が崩壊したため、ルーマニア王国に併合され、1918年念願の「大ルーマニア」が実現しました。

15世紀中葉にルーマニア南部のワラキアを統治したヴラド・ツェペシュ(串刺公)はルーマニアの独立を守るためにオスマン・トルコと果敢に戦いましたが、自分に敵対する者はすべて串刺しの刑に処しました。その残忍性とルーマニアの吸血鬼伝説を結びつけ、1897年英国の作家ブラム・ストーカーによって「吸血鬼ドラキュラ」という物語が創作されました。彼の肖像や石像はルーマニアの縁の地に多く残っています。

ルーマニアの自然は美しい。夏は避暑地、冬はスキー場として賑わうカルパチヤ山脈のシナイアやブラショフ。牧歌的風景のトランシルバニア。美しい紅葉、僧院で有名なブコビナ。中世的風景を残すマラムレシ。夏の保養地が連なる黒海海岸。ドナウ・デルタの水郷等々。ルーマニアの自然は現実生活の厳しさとは裏腹に、四季折々の変化に富み、まことに明るく美しい。1987年のことでした。

## 8. 霞山会

霞山会というのは、戦前の東亜同文会(上海の東亜同文書院を経営していた団体)の後身で、現在、虎ノ門の霞が関コモンゲート西館37階にあり、同階に愛知大学の連絡事務所もございませぬ。会計検査院の上ですな。外務省の霞関会と時々間違えられますが、霞山というのは終戦直後に亡くなられた近衛文麿首相の父君、篤麿公の号で、明治30年代初め東亜同文会の会長となられた同公爵の号を記念して、戦後、会の名前としたものです。

東亜同文会は上海に東亜同文書院を経営したほか、漢口、天津にも日中両国学生のための学校を経営し、月刊誌『支那』を発行したり、講演会を開いたり、いろんなことをやっております。東亜同文書院の卒業生の活躍ぶりについてはよく知られています。

現在の活動は、中国との間に留学生の接受、派遣、中国語教育、日本語教授、定期講演会、研究会など、いろんなことをやっております。それから、月刊誌『東亜』、これは我が国における、ほとんど唯一の中国関係の総合雑誌でありまして、政治、経済、文化などについての専門教育者の論文等をおさめております。霞山会の現会長は近衛霞山公の令孫の近衛通隆さんでしたけれども、残念ながら亡くなられました。

以上、非常に時間が足りませぬのであやふやな話になりましたけれども、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。